The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭言 ： さあ世界に向かって羽ばたこう
Author(s)	権藤, 恭之
Citation	生老病死の行動科学. 2023, 27, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91254
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻 頭 言

さあ世界に向かって羽ばたこう

The time has come to open your wings as a global research community member

権　藤　恭　之

2021 年度で佐藤先生が退職されたので、本号から私が巻頭言を担当することになりました。2019 年に突然始まった COVID-19 パンデミックによる長い行動制限がようやく終焉を迎えつつあるこのタイミングで、この 3 年間の悪夢を振り返るとともに、今後の夢を語らせていただきます。

光陰矢の如し、思い返せばこの 3 年間多くのことが起こりましたが、あっという間の出来事だったように思えます。感染拡大が始まった 2020 年 3 月、私は、大阪大学の協定校であるオランダのグローニンゲン大学に研究交流で派遣される予定でした。感染拡大の状況が日々更新され不安が高まる中、何か起こったらそれも運命かと思いつつ、訪問の準備をしていたことを思い出します。結局出発の 1 週間前にキャンセルになりましたが、予定どおりに出国していたら、卒業式までに帰国できなかったでしょう。結果として卒業、修了者の晴れ姿を見ることができて幸いでした。残念なことに、私が関わるはずであったグローニンゲン大学との研究交流は、そのまま流れてしまい今日に至ります。

4 月以降も大きく混乱は続きました。授業関係はすべてリモートになりました。前期の間は対面の交流ができなくなったため、お昼休みの時間には ZOOM 会議室を所属ゼミの学生たちに常時オープンにして、いつでも気軽に交流できるようにしていました。基本的には限られた学生の出席が多かったですが、たまに思い出したように参加する学生もいて、多少の心の支えになったのではないかと思っています。また、新歓コンパや夏合宿を ZOOM で実施したことなど、何年か経てば懐かしい話になるのかもしれません。授業も ZOOM で行うことになり、講義主体の座学から学生の調べ学習中心に変更するなど、新たな取り組みもできました。学生が調べたことで私自身が新しく知ることもあり、かえって勉強させてもらいました。一方、研究活動は大きく影響を受けました。2010 年から継続している会場招待型の縦断研究は、2020 年度は中止せざるをえませんでした。2021 年度以降は対面の調査を再開することができましたが、調査参加率は現在も予想を下回るレベルで推移しています。学生の研究でも、調査はインターネットを利用した方法を中心とせざるをえませんでした。データを収集するという意味では効率的ですが、実際に目に見える人を対象にしていないので、味気なさを感じるのは私だけでしょうか。ただ、研究法という視点で見ると、対面とインターネットを組み合わせ、対象者の顔がわかる形にすれば、より精度の高いデータを効率的に集約できると考えられます。今後高齢者研究においても、積極的に取り入れることも必要だと考えています。これも新しい気づきです。

研究活動よりもさらに影響を受けたのは大学院生、特に前期課程の学生だったのではないでしょうか。彼らは、パンデミック下で院生となり、これまでの学生とは全く異なる環境で全期間を過ごさなければなりませんでした。特に残念なのは、彼らが対面で学会に参加できなかったことです。私自身、学会参加を回避しようとする傾向がありましたが、この 3 年間

で改めて学会の良さを認識しています。学会に参加することの意味は様々ありますが、特に視野を広げる、人間関係を広げる、という経験を彼らが若い段階でできなかったことは残念で仕方ありません。自分自身の学生時代を顧みると、学会発表は自分が日頃行ってきた研究活動を、研究室外の専門家に、優しくもしくは厳しく評価していただける稀有な機会であっただけでなく、同年代の研究者と同等の立場で意見を交換し、そして本でしかお名前を存じ上げない有名な先生方の生の姿を見る機会でした。そのような場を共有することで自身が研究コミュニティに属していることを自覚し、研究を進めるモーティベーションになったのだと思います。

幸いなことに今年度は、国内の学会参加に関してはパンデミック前の通常状況に戻りつつあります。カレンダーを見ると、7月には老年社会科学会が東京で開催されました。前期課程をパンデミック下で過ごし、博士後期課程に進んだ学生にとっては初めての対面での学会参加でした。開催地の東京から戻った後、以前に増してやる気が感じられたのは、私の錯覚ではないと思います。その後も、認知心理学会、心理学会、応用老年学会、そしてこの3月には発達心理学会が対面で開催されました。昼の部だけでなく、夜の部も含めて研究コミュニティに溶け込んで行けたのではないでしょうか。

一方、パンデミックが終焉しても、戦争、円安など様々な要因で国際学会参加のハードルは依然として高いのが現状です。しかし今年は、IAGG アジアオセアニア大会が横浜で開催されます。これを大阪大学の理念である、「地域に生き世界に伸びる」を実践する契機としましょう。そこには、まだ見ぬ仲間が待っています。さあ、世界に向けて羽ばたこう！

「生老病死の行動科学」第27巻をお届けします。インターネット上での公開もしていますので，そちらもご覧いただければ幸いです。

大阪大学学術情報庫 (OUKA)　http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/

また，当研究室のホームページからもご覧いただけます。

臨床死生学・老年行動学研究室　http://rinro.hus.osaka-u.ac.jp/